

絵本に関する保育環境の課題

～様々な子どもの発達を促すための絵本活用した保育～

菅原航平

Issues of childcare environment related to picture books

Kohei SUGAHARA

【要旨】

絵本は、学校教育法第23条にも『日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと』という一文があるなど、教育・保育の中でも、環境として重要なもののひとつである。また、様々な研究においても、絵本の発達を促す効果が示されている。さらに、絵本は、定型発達の子どものみではなく、配慮を要する子ども達の発達にとっても重要性が変わるものではない。本報告では、新・保育環境評価スケール（ECERS-3）を参考に絵本に関連する保育環境の観察・評価を行い、様々な子どもの発達を促していくために必要な絵本に関する保育環境について整理することを目的とした。結果から、保育者による絵本の使用は現在よりさらに個別的な読み聞かせの機会を増やして行うことが望まれることや、子どもが絵本を落ち着いて読むことのできる環境の整備などをさらに進めていくことが、絵本に関する保育環境の充実にとって必要であることが示唆された。

【キーワード】

絵本 保育環境 発達 個別的な配慮を要する子ども

1. はじめに

(1) 幼稚園教育要領等における絵本

保育における環境として重視されるものは多くあるが、絵本もその一つである。

学校教育法第23条の四には、22条に規定する幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長するという幼児教育の目的を達成するために、『日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと』とい

う一文があり、学校教育法にも絵本という文言が現れる。

幼稚園教育要領（解説）¹⁾でも、幼児期の終わりまでに育みたい10の姿の（9）言葉による伝え合いで、『先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。』と記載があり、幼児は、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に

付けていくものであり、そのため教師は、絵本や物語の世界に浸り込むことで、豊かな言葉や表現に触れられるようにしたり、教師自身が豊かな表現を行い、伝えるモデルとしての役割を果たすことで、子どもが様々な言葉に出会う機会をつくったりするなどの配慮を行うことが必要であることが示されている。

特に、平成29年度の幼稚園教育要領改訂では、言語活動の充実が指導計画の作成上の留意事項に記されており、絵本を含めた言語活動のより一層の充実が求められている。

幼稚園教育要領¹⁾の言葉の領域では、ねらい(3)日常生活に『必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心通わせる。』という記載や、内容(9)絵本や物語などに『親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。』などの記載があり、他の領域においても、絵本に関する記載が多々見られる。内容の取扱いには、(3)絵本や物語などで、『その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。』という絵本に関連した記載などがある。

(2) 絵本が発達に与える影響

絵本に関する研究では、子どもの想像力を育むために絵本は重要な役割を果たしているなどの研究がある(尾崎、2005)²⁾。

絵本が発達に与える影響を調査した研究では、ベネッセ教育総合研究所が実施している、「幼児期から小学4年生の家庭教育調査・縦断調査」(2019)³⁾の結果から、幼児期の読み聞かせ頻度が高いほど、児童期のひとり読み頻度が高まり、言葉のスキルや論理性の獲得に影響を与えることが指摘されている。また、幼児期

の読み聞かせで、絵本の内容について質問したり、子どもの質問に答えたりするという双方向のやり取りに時間をかけているほど、児童期にも本について保護者と話し合ったり、感想を述べ合ったりするという読書体験を共有する時間が長くなり、論理性の獲得に影響を与えていることも合わせて示されている。

(3) 様々な子どもの発達を支える絵本

絵本が発達に重要な役割を果たすのは、定型発達児だけではなく、障害児でも同様である。欧米では、言葉の遅れのある子どもに特別に推薦するブックリストが作られるなど、海外においても障害のある子どもでも楽しめる絵本は重視されている。

両角(2006)⁴⁾は、『ことばの理解やイメージの拡がりに強い制約をもつ自閉症児でも、絵本を楽しむなかで人とのやりとりを楽しみ、コミュニケーションの力をひろげていく。すべての障害児に豊かな育ちを保障する内容に、絵本の楽しみが含まれる。』と指摘している。また、筆者の調査(2018)⁵⁾においても、配慮の必要な子どもの保育においては、言葉の領域は、コミュニケーションの基盤などになるため保育において特に重視されることを指摘している。

しかし、絵本を活用して配慮の必要な子どもの発達を促していくためには、障害や個人の特性に配慮された絵本に関する環境が必要であり、幼稚園教育要領解説¹⁾にも、障害のある幼児などへの指導の項目で、『難聴の幼児に絵本を読むときには教師が近くに座るようにして声がよく聞こえるようにしたり』という記載があり、特別支援教育・障害児保育の際の絵本の活用には、環境構成や援助の工夫・配慮が必要となる。

例えば、山根ら(2011)の研究⁶⁾では、重症心身障害児であっても、絵本の読み聞かせによる学習が生じることは期待できるが、繰り返

し同じ本を用いることや、環境の変化への配慮を行うといった特性を踏まえた絵本の活用の必要があると指摘している。

(4) 絵本に関連する保育環境

幼稚園教育要領¹⁾における、絵本の環境に関する記載では、『幼児は、教師に読んでもらった絵本などを好み、もう一度見たいと思い、一人で絵本を開いて、読んでもらったときのイメージを思い出したり、新たにイメージを広げたりする。このような体験を繰り返す中で、絵本などに親しみを感じ、もっといろいろな絵本を見たいと思うようになっていく。その際、絵本が幼児の目に触れやすい場に置かれ、落ち着いてじっくり見ることができる環境があることで、一人一人の幼児と絵本との出会いは一層充実したものとなっていく。そのために、保育室における幼児の動線などを考えて絵本のコーナーを作っていくようにすることが求められる。』との記載があり、読み聞かせ場面だけではなく、日常的な絵本環境の整備の重要性も示している。

(5) 本報告の目的

本報告では、別府大学附属幼稚園の絵本に関連する保育環境の観察事例を通して、様々な子どもの発達を促していくために必要な、絵本に関する保育環境について考察することを目的とした。

2. 方法

本報告では、絵本に関する環境を観察・評価する視点として、新・保育環境評価スケール①(2016)⁷⁾を用いて保育観察・評価を行った。観察項目は、全ての項目ではなく、サブスケール3『文字と言葉』から、項目14『保育者による絵本の使用(絵本を読んでもらって共に楽しんだり、うれしい気持ちになる)』と項目15『絵

本に親しむ環境(絵本の楽しさ、探す・知る喜びを味わう)』の2項目に絞り筆者が観察・評価を行った。

観察は、別府大学附属幼稚園において、2020年1月に通常の日課を行っている日の午前中の教育時間中に2時間行った。観察対象は5歳児クラス1クラス、4歳児クラス2クラス、3歳児クラス2クラス、満3歳児クラス1クラスの計6クラスを対象とした。

なお、2時間の観察のため、使用の手引きに示されている連続3時間の観察は実施できていない状態での評価である。

3. 結果

(1) 項目14『保育者による絵本の使用』

この項目の対象となる、絵本の使用は、読み聞かせだけではなく、絵本の中の絵を指すことや、全体に対してだけではなく個別に絵について話すこと、そして他の活動のなかで一緒に絵本を使うことを含むが、観察時間内にこれら保育者による絵本の使用は観察されなかった。

このため、指標1.1(観察時間中、保育者は絵本を手にとらない)に該当し、項目を評価した場合は、1と評定された。

なお、別府大学附属幼稚園では、降園時の集まりの時間などに毎日絵本等の読み聞かせの時間が設けられているが、その時間は観察時間には含まれていなかった。また、降園時の集まりの時間などでの読み聞かせは、子どもが楽しめる環境が整えられており、使われる絵本の選択も適切なものであるため、この読み聞かせの時間が観察時間に含まれれば評定は2以上となる。

(2) 項目15『絵本に親しむ環境』

指標1.1から1.4までに該当はなかった。

指標3.1(観察時間中に、少なくとも25分間、子どもが手に取れる本が15冊ある。)では、6

クラス中5クラスで20冊程度の絵本が保育室内の本棚に配置されており、子どもたちが自由に手に取れる環境があった。

指標3.2（子どもが手に取れる本は、フィクション（創造）とノンフィクション（事実）の両方がある。）では、絵本があった5クラス中、全てのクラスで両方があったが、3クラスでは、ほとんどの絵本がフィクションまたはノンフィクションとなっており、偏りが見られた。

指標3.3（手に取れる本のほとんどは状態がよく、内容が子どもにとって全体的に適切である）では、配置されている絵本には、破損や汚れが目立つことはなく、内容も適切な絵本であった。

指標3.4（本はまとめて置かれており、子どもが手に取りやすく、本を手にする場所がある（例：棚にぎゅうぎゅうに詰め込まれていない；棚が高すぎない））では、各クラスの絵本は、本棚にまとめて置かれており、手に取りやすく、保育室内で本を手にする場所があった。しかし、指標5.3に示されるような、くつろいで読めるスペースまでは確保されていなかった。

指標5.1から7.3では、指標7.2（少なくとも5冊の本が、現在のクラスの活動に関係しており、簡単に手に取れることが観察できる）では、5クラス全てで5冊以上季節（冬）を題材にした絵本が置かれており、特に5歳児クラスではその他にもクラスの現在の活動と関係する本が5冊以上観察された。指標5.1から7.3では、それ以外の指標に該当する項目はなかった。

これらのことから、6クラス中5クラスで評定は3、1クラスで評定は1となった。

4. 考察

（1）観察事例からみる絵本に関する保育環境：

項目14『保育者による絵本の使用』

まず、『保育者による絵本の使用』については、観察時間中に保育者による絵本の使用が観察さ

れなかった。

これは、今回観察対象とした附属幼稚園以外の園にも共通するケースが多いが、通常の保育の中で保育者が絵本を使用する機会が限られている傾向にある。

日本の保育施設では、活動の導入の際に関連する絵本を読んだり、給食前や午睡前、降園時等の活動の区切りにクラス全体を対象として読み聞かせを行うことが多い。また、週に1度程度絵本の時間があり、絵本の部屋等に行き子どもが好きな本を借りて読むなどの活動で絵本が使用されることも多い。

しかし、ECERS-3では、指標7.3（保育者は、2例以上、子どもにインフォーマルに（＝小グループや個人に）本を読んでいる）などの項目があるように、海外ではクラス全体を対象とした読み聞かせだけでなく、保育時間中に日常的に小グループや個人に対して読み聞かせをすることが求められている。このような個別的な読み聞かせは、配慮の必要な子どもの発達を促す上でも重要であり、指標5.2（絵本の読み〔聞かせ〕の時間に、特別な配慮の必要な子どもに対して手立てがとられる（例：発達の遅れがあり言葉がうまく使えない子ども、あるいは集団になじめない子どもには小グループで行うなど）などの項目でも、個別的な読み聞かせなどの配慮の有無を評価の対象としている。

日本の保育の傾向としては、3歳未満児の保育では、小グループや個別的な読み聞かせをよく見かけるが、3歳以上になると小グループや個別的な読み聞かせの場面を見かけることは少なくなる。しかし、ECERS-3においては、指標7.3で（3時間の）観察時間中にインフォーマルな読み聞かせが2度以上観察されることが6・7（とてもよい保育環境）と評定される項目に含まれており、日本での保育実践においても、小グループ・個別の読み聞かせを行うことは、配慮を必要とする子どもを含め、保育を充

実させていくためには重要な事項であると考えられる。

これは中澤ら(2005)⁸⁾などの先行研究によっても支持されており、中澤らの研究では、複数の読み聞かせのグループサイズを検討した結果、3名のグループが物語理解やイメージ形成に最も有効であったとの報告がある。同様に、大元ら(2012)⁹⁾の研究でも、1名、3名、24名の読み聞かせを行ったところ、3名グループで行った場合が最も正反応が多かったことを報告している。また、集団での読み聞かせについては、4～5歳児にとっては集団での読み聞かせが有効であるとの會澤ら(2019)¹⁰⁾の報告がある。

また、とてもよい保育環境と評価される、指標7.4(保育者は、子どもが興味をもっていることに対して、疑問を明らかにしたり、情報を得たりするために、一緒に本を見る)についても、虫や花の種類を確認するために保育者と子どもが図鑑を一緒に見る等で絵本を活用する場面は見かけるが、日常的に観察されることは少なく、さらに絵本を様々な場面で活用していくことも望まれると考える。

(2) 観察事例からみる絵本に関する保育環境:

項目15『絵本に親しむ環境』

観察では、指標1.1から1.4には該当せず、指標3.1から3.4には該当していた。指標5.1以降で該当しなかった点としては、たくさんの本がある・手に取れる絵本の選択肢が広いという点、観察時間中に絵本に興味を示し手に取っている子がいるという点、くつろいで読めるスペースがあるという点などであった。

この中でも、絵本がくつろいで読めるスペースを確保するという事は、多くの保育施設で課題になっていると考えられる。ECERS-3の注釈でのくつろげるスペースに関連する記述では、『敷物がありクッションや子どもがもたれ

かかったりできるような柔らかくて大きな遊具や子どもサイズのビーズクッションなどがあれば快適な家具として認められる。木のひじ掛けのついたクッション付きの椅子や子ども用ロッキングチェアなども認められる。』などの記載がある。このような、くつろいで絵本を読めるスペースが十分に確保されていないと、子どもが絵本に興味を持つことや絵本に集中することも少なくなると考えられる。このことは、絵本に関連する環境に限ったことではなく、日本の3歳以上児の保育室には、一人や二人で落ち着いたり、共に考えられるようなスペースや、マットやクッションなど柔らかくリラックスできるような物的な環境が整えられた静的なスペースの確保についてあまり考慮されていないことが多い。これらの環境は、情緒の安定などを通して、子どもたちの遊びや学びを支えるために重要な空間である。

このような、静的な空間が確保された上で、絵本の数や分野が多様で選択肢が多くなると、子どもの絵本への積極的な関心が促され、様々な遊びや学びと絵本が繋がっていくものと考えられる。そのことは、『1. はじめに』でも触れた幼稚園教育要領¹⁾の中にある、『落ち着いてじっくり見ることができる環境があることで、一人一人の幼児と絵本との出会いは一層充実したものとなっていく』との記載でもはっきりと示されている。

(3) まとめと今後の課題

ECERS-3を用いての観察・評価の結果から、絵本に関する保育環境を充実させていくために望まれる点として、個別的に読み聞かせなどを行う機会を増やすことや、くつろいで絵本を読むことのできる空間を整えることが必要であることが示唆された。

このことは、筆者の経験では、今回観察対象とした。別府大学附属幼稚園に限ったことでは

なく、様々な保育施設に共通する課題であると
考えられる。

ECERSの翻訳者である、埋橋の調査(2017)¹¹⁾
でも、今回の絵本に関する2つの項目を含むサ
ブスケール3『文字と言葉』の評点の平均は、
全サブスケール中2番目に低く、項目12『語彙
の拡大』、13『話し言葉の促進』に注目すると、
教師自身の語彙が必ずしも豊かとはいえない状
況が観察されている。項目14『保育者による絵
本の使用』、15『絵本に親しむ環境』に注目す
ると、園によって取り組みの差があるが、教師
によっては必ずしも絵本の重要性が認識されて
いない(例：絵本の読み聞かせが毎日の日課に
なっていない、子どもが絵本を読みたくなるよ
うな環境が設定されていない)状況が明らかにな
った。項目16『印刷物(書かれた)文字に親
しむ環境』については、日本においてどのよう
な取り組みが望ましいのかを検討する必要がある。
』と述べており、このような研究などからも、
絵本を含む言葉と文字などの言語環境は新要領
での重点の一つとなっているが、保育現場での
実際の取り組みの状況は十分でないと考えられ
る。

しかし、本報告の課題として、今回は、別府
大学附属幼稚園という1園のみの保育環境を取
り上げており、短時間の観察であり、3歳未満
児の観察も含まれていないため、結果の一般化
は難しい。このため、今後は観察の事例を増や
して分析・考察を深めていく必要がある。

また、評価と改善は一体的に考える必要があ
るため、望ましいと考えられる絵本に関する保
育環境についての整備や援助の工夫について保
育者とともに実践し、成果や課題を確認してい
くことを通して、理解を深めていくことにも今
後取り組んでいきたい。

5. 謝辞

調査にご協力くださった別府大学附属幼稚園

の皆様へ感謝いたします。

6. 引用参考文献

- 1) 文部科学省、幼稚園教育要領解説 平成30年、
2018、フレーベル館
- 2) 尾崎恭子、幼児の精神発達と絵本、中国学園紀要、
2005、4巻 61-67p
- 3) ベネッセ教育総合研究所、幼児期から小学生の
家庭教育調査・縦断調査、2019
- 4) 両角正子、障害児の子育て支援と療育における
絵本の役割-コミュニケーションの力をひろげる、
2006、障害者問題研究33巻4号 275-282p
- 5) 菅原航平、付属認定こども園における特別支援
教育・障害児保育の取組(1)～発達障害児に対
する個別の指導計画に、佐賀女子短期大学研究紀
要、2018、52集2号 169-172p
- 6) 山根康代、小枝達也、重症心身障害児の学習効
果と環境設定-唾液アミラーゼ活性値を用いた検
討-、鳥取大学地域学部紀要、2011、8巻1号
67-74p
- 7) テルマ・ハームス、リチャードM. クリフォード、
デビィクレア著、埋橋玲子訳、新・保育環境評価
スケール①(3歳以上)、2016、法律文化社
- 8) 中澤潤、杉本直子、衣笠恵子、入江綾子、絵本
の読み聞かせのグループサイズが幼児の物語理
解・イメージ形成に及ぼす影響、千葉大学教育学
部研究紀要、2005、53巻 203-210p
- 9) 大元千種、青柳恵里香、絵本に対する幼児の関
心に及ぼす読み聞かせのグループサイズの影響、
筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要、
2012、第7号 167-178p
- 10) 會澤のはら、片山美香、高橋敏之、幼児を対象
とした集団における絵本の読み聞かせに関する研
究動向、岡山大学教師教育開発センター紀要、
2019、9巻 215-228p
- 11) 埋橋玲子、第2章ECERS-3とSSTEWの試行調
査とその結果 第1節ECERS-3の紹介と実施結
果、2017、幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の
質に関する研究<報告書> 134-139p、国立教育
政策研究所幼児教育センター